

東京農業大学図書館標本室における古農機具類の収集と整理

Original Farm Tools Stored in Specimen Room,
Library of Tokyo University of Agriculture

梅 室 英 夫*
Hideo UMEMURO

I はじめに

東京農業大学図書館(図1)は、農学を研究・教育する者の場として、文書、実物、視聴覚の情報媒体を備え、研究者と学生の利用に供する場である。そのなかで標本室は、各学科(表1 東京農業大学は農学の単科大学)の専門事項に対応して、標本の調査、収集、整理、展示、収蔵、教材・研究用資料の製作等を主な活動内容としている。主なる収蔵品は、腊葉、農業昆虫、古農機具類(以下資料とする)などである。本報告では、これらのうち、資料の収集と整理について述べる。

図1 東京農業大学図書館の組織

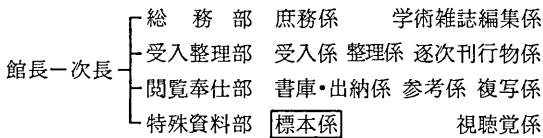


表1 東京農業大学農学部の各学科名

1 農 学 科	6 農業経済学科
2 林 学 科	7 醸 造 学 科
3 畜 産 学 科	8 農業拓殖学科
4 農芸化学科	9 造 園 学 科
5 農業工学科	10 栄 養 学 科

II 収集の必要性と開始時期

昭和30年代は、所得倍增政策によって、日本経済は急速な進歩発展がみられた。農業においても、他産業と同様に転換期を迎えた。その要因として、動力源の移行と農業資材にビニールフィルムが普及したこと等が考えられる。それまで農業動力源としていた人力・畜力は動力に移行した。この動力の導入によって、余剰労働力は、従来の経営形態外の農業または他産業へ流出した。さらにビニールフィルムの普及によって、経営形態、栽培時期、栽培地域等の栽培方式の変化がみいだされた。このことは、従来まで全国各地で行なわれていた、各地域に特有な慣行の農作業方法を失なわせる結果となり、画一的な方法に変化させたことになる。それまで慣行農作業に使用された各地の資料は、機械力の導入により不要の遺物とされ、放置、または廃棄されている。しかも、各地に残る慣行農作業に使用された資料のほとんどは木製、竹製、布、紙、藁、一部金属等のもので、放置すれば消滅するものである。そのこと自体は時勢の流れとして、真にやむをえないことであり、農業に従事するものの、当然の行為と考える。しかし、農学を学び、研究する者にとって、日本農業の発達過程を歴史的、具体的に示すものとして、これらの資料は最も重要であると考えられる。これらを収集することによって、過去の集積された技術を時代的、地域的に比較することもできる。さらに、将来における農機具類の進歩発展の基礎にもつながると考えられる。以上のような必要性を考慮して、昭和43年4

* うめむろ ひでお
東京農業大学図書館標本室
Specimen Room, Library of Tokyo
University of Agriculture

原稿受理: 1979年12月3日
連絡先(勤)
〒156 東京都世田ヶ谷区桜ヶ丘1-1-1
(電話) 03・420・2131 内線459

月から、現在に至るまで収集を続行している。
 ただし、収集開始時期は、遅きにすぎたといえよう。

Ⅲ 収集の対象

1. 資料の範囲

民俗学において吉田⁽¹⁾は、「農具とは農民が自分の手足に何かの具をつけて動かすことによって、自分の身がらくになると同時に作業能率を増すことができるという意味から工夫されて使う具」と述べている。また、農業機械学において庄司⁽²⁾は、「農業機械とは農の作業に用いる機械器具の総称である」と述べている。しかし表1に示すような、本学のすべての学科の専門事項に対応するには、農機具の範囲を両者の定義した範囲に限定したのでは不十分である。そこで栽培・飼育から加工・調理、販売までの作業に使用するすべての用具を資料として扱う。

2. 資料が実用された時代の範囲

昭和36年に農業基本法が成立し、昭和37年から第1次農業構造改善事業が開始された。この事業は、農業経営規模の拡大と近代化、米麦作から畜産、果樹作などへの選択的拡大による農業と他産業との経済的、社会的地位の均衡などを目標に規定している。すなわち、農業の生産性を高め、農家の所得増大をめざすことにある。経営規模の拡大化によって、動力源は人力、畜力から動力へと移行した。表2に示すように水田耕起においては、昭和35年から昭和36年にわたって、過半数の農家が畜力から動力に移行している。畑作耕起についても、同様に昭和36年までに過半数の農家が移行した。さらに、表3に示すようにハンドトラクター1台に対する農家数は、昭和37年が最低であり、その後は農業構造改善事業の開始により、増加した。そのひとつの理由として、経営規模の拡大化によって、ハンドトラクターから乗用のトラクターへ変わったと考えられる。

これらの事情を考慮して、昭和37年以前に製作され、実用された用具、またはそれ以後も同じ構造を有し、使用された用具を対象として、資料とし、収集している。

表2 農作業のおもな動力源別農家数

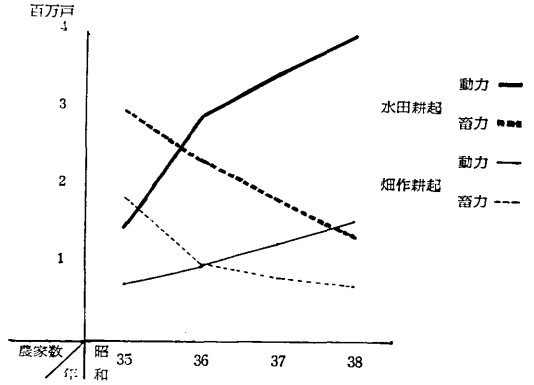
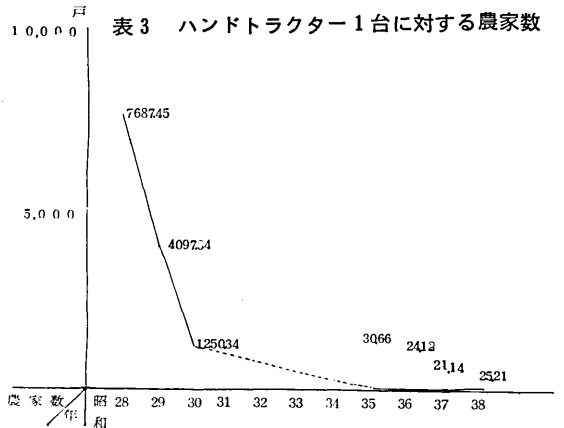


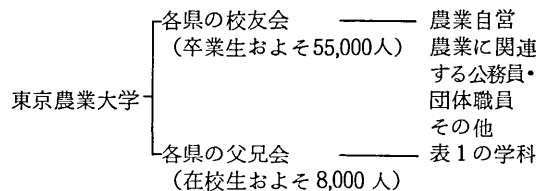
表3 ハンドトラクター1台に対する農家数



Ⅳ 収集の地域、および方法

収集の対象地域は日本全国とした。収集の方法としては、図2の東京農業大学の校友会と父兄会の組織を通じて資料の寄贈願いを配布し、その回答の結果によって、担当者が直接、現地に赴き、聞き取り調査を行なった。資料の運搬は業者に委託しないで、担当者の手で搬入した。東京農業大学の校友、および父兄は、直接、間接に9割以上農業に関連した職種であるので、上記の組織を通じ

図2 収集における組織



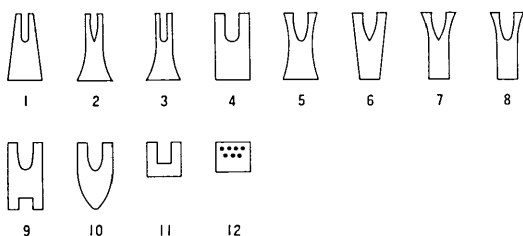
ることは、収集上、はなはだ効果的であった。

V 収集資料の特徴, および点数

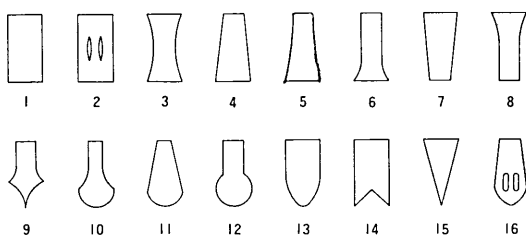
各地の異なる地形は、農作業の方法を多様化させ、それに伴って資料も多種である。たとえば、鋤を刃床部の平面形態に着目して分類すると図3となる。同じ作業を行なうにも鋤の形態を異にしている場合もあり、また逆の場合もある。多くの資料は単独の農作業に使用されることが少なく、複数の作業に使用されることが多々ある。さらに収集した鋤には、一定の摩耗の仕方をしたものが多数あり、それによって、作業姿勢、作業方法の推測が可能である。

図3 刃床部の平面形態

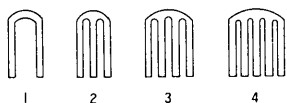
風呂鋤の鏡



金 鋤



備中鋤



梅室原図

また、写真1の背当ては、負荷力の異なる部分が擦りへり、その度合は労働の激しさを現わす。この擦る位置によって、荷を背負う作業姿勢を推定することも可能である。写真2に例示したように、資料のなかには、製作者名、製作年月日、所有者等が記入されているものが多い。この記入内容によって、農機具類の発達過程や流通経路等を推定することが可能である。

このように、収集された資料は、農学の研究と教育に直接役立つものである。

資料は現在までに、全国の351戸の農家から2381点収集された。

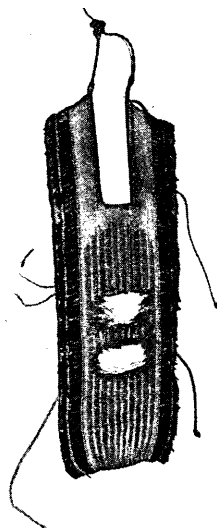


写真1 背 当 て

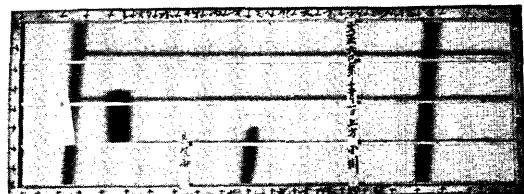


写真2 万石の網

VI 整理

資料は、つぎの作業順序に従って整理する。

1. 寄贈者別リストの作成
2. 台帳記入
3. 受入番号・現地名・寄贈者名・住所・収集年月日・聞取りによる主なる事項を記載した木製札を資料につける。同時に資料に直接、受入番号を記入する。
4. 資料に附着したものの採集（特に資料自体に対する害虫、資料に附着したものに対する害虫、および資料の使用に対して附着した穀物等の採集によって、それらの資料の特徴が判明すると考えられる）。

- 5. 燻蒸
- 6. 掃除, 洗濯
- 7. 計測
- 8. 撮影, 特に墨書した部分については赤外線撮影を行なう。
- 9. 白黒写真の作成

資料の分類は、表4に示す分類表によって行なう。この分類表は、大学各学科の専門事項を考慮して1969年に作成されたものである。

表4 東京農業大学図書館標本室古農機具類分類表

1. 整地用具	耕起用	鍬, 犁, 鋤, 踏鍬, 鋤簾, 秋, 耕耘機 等
	攪碎用	塊割, 馬鍬, 振馬鍬, 砕土機, ハロー等
	鎮圧用	ローラー 等
2. 育成用具	施肥用	肥料柄杓, 肥料撒布機, ホーク 等
	成形用	筋引, 田植網, 田植定木, ころがし等
	播種移種用	播種機, 移種機, 銷足 等
	中耕除草用	鎌, カルチベーター, 雁爪, 土入機, 水田中耕除草機, 草掻 等
3. 防除用具		噴霧機, 撒粉機, 誘蛾燈, 爆音機, 鳴子, 泥掃, 猪よけ 等
4. 揚排水用具		風車, 水車, 龍骨車, 踏車, 振バケツ等
5. 収穫用具	刈取用	鎌, 手押型稲麦刈取機 等
	掘取用	山芋掘, 菊掘, 連根掘 等
6. 穀物製調用具	脱穀用	拔著, 麩平, 穀打台, 千歯, 穀打, 豆叩, 玉蜀黍脱粒機 等
	脱稈用	稈摺臼, 摺摺機 等
	選別用	箕, 唐箕, 団扇, 農用扇風機, 万石筵, 篩, 米選機 等
	乾燥用	乾燥機 等
7. 収納用具	貯蔵用	袋, 吠, 麻袋, 紙袋, 殺入等
	包装用	目貫, 罎斗, 袋締機 等
8. 穀物製精用具	精米用	臼, 杵, 踏臼, 精米機等
	精粉用	石製摺臼, 精粉機 等
	精麦用	押麦機 等
9. 食品加工用具		臼, 杵, 木鉢, 蒸籠, 製麵機, 糴切, 醸造, 豆腐製造器, 澱粉製造器 等
10. 糞加工用具	製用	糞選, 糞打, 横槌 等
	加工用	繩絢機, 建機, 俵編, 吠織, 糞依機, 糞箱, 草鞋編, 糞編等
11. 肥料製調用具		堆肥切, 油粕切, 豆玉削, ニシン切等
12. 特用作物用具	収穫用	刈取鎌, 茶摘鉄, 等
	採織用	剥皮機, 蒸桶, 綿繰, 和紙漉等
	搾油搾汁用	蔗茎搾, 油搾, 薄荷蒸溜器等
	製茶用	焙炉 等
13. 園芸用具	栽培管理用	切出, 剪定鉄, 如露, 植木鉢等
	収穫用	鉄, 籠 等
	選別用	選果機 等
	加工用	干糶切 等
14. 養畜用具	牧草製調用	レーキ, モアー 等
	飼料製調用	押切, チョッパー 等

飼育管理用	給餌器, 給水器, 辨別器, 育雛器, 飼葉桶, 爪切, 毛ブラシ, 養蜂器 等
毛処理用	鉄 等
15. 養蚕用具	桑樹用 桑切鎌, 桑摘爪, 桑拔器, 拔根機 等
飼育管理用	桑切刃丁, 桑摘籠, 蚕箔, 蚕架, 催青器, カルトン, 火鉢, 等
上簇整繭用	簇, 毛羽取機, 簇固, 乾繭機等
整糸用	選繭機, 糸車, 鍋 等
機織用	機織機, 座繰 等
16. 伐採用具	鋸, 鉋, 斧, 樵 等
17. 土工用具	鶴嘴, 掛欠, シヤベル等
18. 運搬用具	一輪車, 荷車, 田舟, 籠, 背負梯子, 籠, 担架, 畚, 手鉤 等
19. 装具類	靴, 口籠, 牛靴, 手綱, 鼻輪, 馬銜 等
20. 作業衣類	等, 資, 股引, 絆纏, 前掛, 手甲, 脚絆, 糞靴 等
21. 度量衡類	枘, 秤, 尺杖, 間竿 等
22. 動力	水車, 石油発動機, モーター 等
23. 製炭用具	
24. その他	

VII 収蔵

保存にあたって、資料の素材別に表5に示すような処理を行なう。ただし、資料は単独の素材ではなく、複数の素材で構成されたものが、大多数であり、処理には困難をきわめることが多々ある。

表5 素材別による資料の保存処理

素材	処 理
金 属	錆の抑制
藁	乾燥抑制 防虫 整形
木	乾燥抑制 防虫
布・紙・竹	防虫
皮 革	防虫 硬化抑制
土・岩石	風化抑制
付 セン	脱落防止 汚染防止

個々の処理方法については、別に報告する予定である。現在、資料の収蔵中の建物は、図書館の一部として建築された部屋を利用しているために、収蔵には適切でない。そこで、仮りの遮光、断熱等の処置を施している。延面積、およそ300㎡ 高さ2.5m、容積、およそ800㎡である。収蔵の方法としては、資料を木製棚、または床に定置、および壁面に懸垂している。収蔵庫内における資料の配列は、原則として表4の分類による。

VIII 展示・公開

展示室は図書館（4階建、延面積4,200㎡）の1階に

位置し、図書館の利用者はその一部を通路として、閲覧室に出入りをする。展示室の面積は、およそ150㎡、高さ4.0mである。常設展示として、日本鶏52羽の剥製を扱い、この他、年2～3回程度の特別展示を行なっている。この特別展示は、テーマによって、すべて作物、家畜等の標本を中心として、その栽培、飼育、管理、加工、販売等に至る資料と、それらの使い方を示す写真、イラスト等を展示している。

たとえば、茶の展示においては次のものを展示した。

1. 実
2. 品種の腊葉
3. 各地の栽培、管理、収穫、および製茶の方法を示す写真と、それらの用具
4. 製品の保存用具
7. 各種製品の見本
8. おいしい茶の入れ方のパネルと茶器
9. 製品を利用した加工食品
10. タンニンの利用法とその利用製品
11. 文献、図書。

収蔵庫は、利用者の申し出により、見学できる。主な資料には、和名と英名を記載したラベルが付してある。これはアジア、アフリカ、南米方面の見学者が特に多いためである。展示案内は年4回発行の図書館ニュースに紹介され、学生、職員に配布される。

展示は一般には公開されていないが、利用者の申し出により、見学を許可している。このほか、資料の正しい理解をたすけ、収蔵物をあきらかにするために、1978年に収蔵品のすべてを掲載した東京農業大学図書館標本室所蔵古農機具類写真目録（B5版483頁 総アート紙図版2,038枚 白黒写真）を刊行した。

IX おわりに

農学を対象とする大学において、必要な情報は多く、この情報は文書情報だけでは充分でなく、実物による情報はきわめて重要である。東京農業大学の研究者や学生は、図書館の図書、文献、視聴覚資料、標本を利用したり、さらに農場、加工所等の実習において、実物の栽培、飼育、加工することによって、情報を入手している。こ

のことは農学の研究教育にとって不可欠なことである。かつて、各地における農業は、その土地の気候、風土に立脚して、特有の慣行農作業の方法があった。その方法は永い経験を通じて創り出されたもので、各農家は各種の作物を適地適作の原則に従って栽培を行なっていた。しかし経済の発展に伴ない、農作業の方法は適地適作を無視し、画一的になった。これは横井時敬のいう「農学が盛んになったために農業は衰える⁽³⁾」がまさに農学を重視し、農業技術を軽んじたかに匹敵する。

現在、農業においてもエネルギー危機が叫ばれている折、筆者は資料を通じて、再度作物栽培の適地適作の重要性を改めて認識し、将来の農業に、この方法を生かせることを切に望むところである。

今後の方針として、各地の資料を詳細にわたって収集し、体系化をはかる。さらに資料を利用者に有効に活用させるために、引続き資料写真目録の発刊と写真目録カード化を行なう。これに伴ない、個々の資料の聞き取り調査をもとにして、その使用方法、製作方法等について、解説書を作成する予定である。これらの資料から多量の情報を生産して多くの利用者に迅速かつ、正確なデータを提供できるようにしたいと考えている。

本報告を作成するにあたって、東京農業大学総合研究所 吉村典夫氏の多大な協力を得た。ここに感謝の意を表す。

参考図書

- 1) 吉田三郎 日本の民具P 223 日本常民文化研究所編。
- 2) 庄司英信 農業機械学概論P 3 養賢堂。
第28～30, 35～38次農林省統計表。
東京農業大学図書館標本室所蔵古農機具類写真目録1978。
- 3) 農学概論 野口弥吉P 175 養賢堂。